

文学的文章の授業づくり(その1) 「教材研究の仕方」

- ・国語は何を教えればいいのか分からない。
 - ・場面ごとの読み取りから脱却できない。「全体読み」をさせるための指導計画をどのように立てればよいか分からない。
 - ・児童生徒が主体的に学ぶために、どんな発問をすればよいか分からない。
- そんな悩みを持っている先生方も多いと思います。そこで、「教材研究の仕方」と「単元構想シート」の作成を通して、授業を見直しましょう。



文学的作品を分析的に捉える「10の視点」

A 作品の設定

①時と場所

②中心人物

[作品の中で最も変容した人物]

③対人物(対象人物)

[中心人物に影響を与えた人物]

④語り手

[一人称視点、三人称視点]

B 中心人物の変容

⑤はじめの中心人物

[出来事が起こる前の気持ち]

⑥おわりの中心人物

[出来事や対人物との関わりによって変容した気持ち]

C 作品の構造

⑦事件の発端

[中心人物の変化のきっかけとなる事件や出来事]

⑧山場に向かう場面

[中心人物の成長につながる出来事や情景]

⑨山場(クライマックス)

[中心人物の気持ちが大きく変わる場所]

D 作品の主題

⑩作品が一番語りかけてくること

作品を分析的・論理的にとらえる10の視点

単元名 [こんぎつね]

学年 [4年]

分類	視 点	児童に読み取らせたい内容
A 設定	①時と場所	・お城があり殿様がいた時代 ・中山という所
	②中心人物	・ごん ・ひとりぼっちのこぎつね ・しだのいっばいしげった森の中に穴を掘って住んでいる。 ・夜でも星でもいたずらばかりしていた。
	③対人物(対象人物)	・兵十 ・ぼろぼろの黒い着物 ・母親と二人暮らし
	④語り手の視点	・三人称視点 ・茂平の知り合い、中山の近くの村に住んでいる。
B 中心人物の変容	⑤はじめの中心人物	・ひとりぼっち ・いたずら
	⑥おわりの中心人物	・いたずらばかりしてごめん。 ・分かってくれてよかった。 ・気持ちが伝わってよかった。
C 構造	⑦事件の発端	・「ははん、死んだのは、兵十のおっかあだ。」
	⑧山場に向かう場面	・「ちょ、あんないたずらをしなけりゃよかった。」 ・「おれと同じ、ひとりぼっちの兵十か。」 ・ごんは、うなぎのつぐないに、まず一つ、いいことをしたと思いました。 ・「神様にお礼を言うんじゃあ、おれは引き合わないなあ。」
	⑨山場(クライマックス)	・「ごん、おまいだったのか。いつも、くりをくれたのは。」 ・ごんは、ぐったりと目をぶったまま、うなぎきました。 ・火なわじゅうをばたりと取り落としました。 ・青いむじりが、まだ、つづから細く出ていました。
D 主題	⑩作品が一番語りかけてくること	

「10の視点」を活用した分析例

「10の視点」を活用して中心人物の変容や作品の構造を分析することで、この教材で児童生徒に捉えさせたいことが明確になります。みなさんも、「10の視点」を活用して教材研究を行ってみてください。

